きょうと福祉倶楽部だより

2014年　初夏号

今年も早くも半分を過ぎました。月日の流れの早さを強く感じます。
新年に立てた目標達成のためにも気持ちを新たに残り半年を過ごしたいと思います。
今回久しぶりのおたよりです
きょうと福祉クラブの利用者様に原稿を書いてもらおうとお願いしたところ、快く承諾して頂きすぐに原稿を書いてくださいました。

彼女は重い障がいをお持ちで、一日のほとんどの生活をヘルパーと伴に生活されています。ですが、とても明るくほんわかした性格の彼女にはヘルパーのほうがいつも励まされ、元気をもらっています。
今回もまたまたありがとう。
大切な原稿は今回と次回２回に分けて紹介します。　　編集　n

© http://bigpig.com

リフトとわたし 1

長井　秀美

私は筋肉の難病です。現在は入浴、食事、トイレ以外はほぼ人工呼吸器をつけ京都市内で在宅生活をしています。週二回、作業所でパソコンを使って福祉的就労にもついています。　それな私ですが、その生活はほぼ全介助。自分一人では何もできません。
在宅で母と妹と三人で生活する中で、欠かせない支援が、訪問ヘルパーの派遣です。
毎日、何時間と、途切れることなくさまざまなヘルパー事業所から派遣を受けています。

私は体重も重く、四肢まひがあり、身体に力が入らないという病気のため自宅には京都市から助成を受けて、リフトを設置していただきました。
リフトの導入は今から約 10 年前にさかのぼります。

今回は、そのリフトと私の生活やリフトへの思いについて、この誌面をお借りして、書かせていただきます。

リフトの助成を検討したのは、その当時、訪問していただいていたヘルパーさんの負担が大きく、そうした要望が、担当のヘルパーさんから出されたことが一番の決め手になりました。それまではリフトを設置することも導入して利用することも、私自身、思いもよらなかったことでした。

それな中、ヘルパーさんが私の重い身体を必死で抱えて介助し、また熱心にリフトの敷設を希望される姿に、リフトをいれて介助してもらうことを決意しました。
それからリフト設置のために制度について調べ、何回もヘルパーさん達やその派遣元の事業所や私と家族、福祉事務所のケースワーカーさんと話し合いをして、前向きにリフトの導入を検討していきました。

はじめは確かにリフトを使うことにためらいもありました。
「本当にリフトをつけて介助がうまくいくのか…」
「私が重いからリフトをすすめられるのか…」それな気持ちも正直、ありました。
しかし、その戸惑いを残しつつですがその後リフトの設置の話も進み、リフトを使った支援を始めました。するとすぐに今まであった不安や戸惑いは消え去り、安全で安心できる介護をケアする側もケアされる側も、相互に気持ち良く共有できるようにまでなりました。

在宅生活をしていく中で、リフトは生活上、我が家では欠かせない大切な介護機器になっています。また、あの時にリフトの敷設をすすめて下さった方には、感謝の気持ちでいっぱいです。

ところでリフトの一番の利点はヘルパーさんが身体を抱えたりしないので、ヘルパーさん自身の身体にかかる負担がほぼなくなったことと、私たちも安心してその分介護を受けられることです。それまではお互いに、抱える側も抱えてもらう側もはらはらしていましたが、リフト導入後はそうした不安な気持ちも解消しました。

また一方で、抱えないので力の弱い方も派遣が可能になり、派遣する側も派遣できる人材の幅が広がったこと、腰痛の心配がないので、長期間安定して人材が確保できるという大きな利点も出てきました。抱えたりしないので、ヘルパーさん自身の身体にかかる負担がほぼなくなったことと、私たちも安心してその分介護を受けられることです。
それまではお互いに、抱える側も抱えてもらう側もはらはらしていましたが、リフト導入後はそうした不安な気持ちも解消しました。

次号へつづく…

訪問介護の仕事をはじめて思うこと

m・m

私は、介護の仕事を始めて８年半になります。
専門学校を卒業し介護福祉士になり、介護老人保健施設
(”ろうけん”と略されることもよくあります)で５年半、
ユニット特養「ユニットケア＝新型特養」と称される、
新しく設立された特別養護老人ホームに半年、

そして現在の職場である「きょうと福祉倶楽部」でお世話になり、訪問介護をはじめ２年半。現在に至ります。

現在の訪問介護の仕事を始めいろいろなことを考えるようになりました。
「利用者様にとってどちらの環境が良いのだろう？」

思い返すと、老健で働いているときは、介護の経験もなく未熟さもあったかもしれませんが、利用者さまが何を考えどうしたいかなど、あまり考えずに時間に追われ起床、食事、排泄、入浴を時間通り、一日のスケジュールにそって、流れ作業のようにおこなっていた記憶があります。
人と接する仕事をしたくて介護の仕事を始めた私にとって、機械的な流れ作業のような仕事は老健を辞職する一番大きな理由になったのかもしれません。

そしてその後、きょうと福祉倶楽部で訪問介護の仕事を始めはじめました。

訪問介護の仕事は１対１で接することができ、目の前の利用者様の性格や癖、その人のライフスタイルなど、今まで重要視していなかった事が重要になりました。そして、毎日、毎日考えながら介護するようになり、始めて本当の意味で利用者さまに寄り添う、自立を尊重するということが少しですがわかったような気がします。多少の不自由があっても、自宅で自分らしく暮らす利用者様は生き生きとされているように感じます。

どちらの生活が、利用者さまにとってよいのか･･･というのは、一人一人考え方が違うように、感じ方もちがうのかもしれないので良い悪いでは決められないけれど、
私は、目の前の利用者さまに寄り添い、私が関わることによって少しでも安心して生活できる利用者さまが増えるように頑張りたいなと思いました。

ホームページをリニューアルしました
きょうと福祉倶楽部で　検索
スタッフブログものぞいてみてください♪

アスペルガー症候群だっていいじゃない

(ヒューマンケアブックス)
[単行本（ソフトカバー）]
しーた（著), 田中康雄（監修)
単行本（ソフトカバー）：160 ページ
出版社: 学習研究社 (2010/9/22)
ISBN-10: 4054045847
ISBN-13: 978-4054045842

介護支援専門員が処遇困難な利用者さんと考える方たちは少なからず存在します。わたしも様々な方のお手伝いをさせていただく中で自分の無力感を感じることが多々あります。
ある脳梗塞後の男性の方。一般科医療機関でも問題患者として受け入れられなくなり、ケアマネもお手上げ、身内の助言も聞く耳を持たず身内の方は「高次機能障害」ではと考えておられました。
どうにもならなくなり最後は精神科病院に入院、沢山の鎮静のため薬が処方される中「寝たきり」に。
困り果てた身内の方の相談から当方で支援を受け持ちました。

彼の生活歴、職業歴を聴き取る中、「これは高次脳機能障害ではない」と直感し、支援の方向性をアスペルガー症候群と仮定をしてはじめました。
こだわりの強い彼が新たなプランになじみ身体が不自由な中、独り暮らしを定着させるまでに相当な時間を要しましたが生活ができるようになりました。この支援方法を考えるにあたり、障がい特性理解の教科書になったのがこの本です。
障がい当事者の著者が自分に隠れていた障がい特性が生きづらさの原因であることを理解するまでのプロセスや著者自身の体験から定型発達のかたとの違いを読者に示すことにより「文化の違う」自閉症スペクトラムの人と定型発達の人、どうすれば理解し合い共に生きていけるのかをこの本は問題提起をしています。
援助職は援助者として育つために、家族は家族として少数派として悩んでいる家族を理解する資料としてこの本は有効なテキストになります。

しーたさんのホームページ http://ameblo.jp/asupe-san/

kwc
有限会社　おとくに福祉研究所
きょうと福祉倶楽部
〒617-0824
長岡京市天神４丁目7-12　ハイツ東台101号
TEL　075-958-2560
FAX　075-957-2808
E-mail　kyoto-care@club.email.ne.jp